

第2章 みどりの現状

2-1 本市の概況

(1) 自然的特性

①位置と地勢

本市は福岡県の北東部に位置する九州最北端の都市です。道路と鉄道により関門海峡を隔て、本州・山口県へつながっています。

本市の北側は日本海（響灘）に、東側は瀬戸内海（周防灘）に面し、200km以上の長い海岸線を有しています。しかし、都市の発展に伴う海岸の埋立てなどにより、海岸の多くは人工海岸となっています。また、響灘の沖合には藍島、馬島などの離島も存在します。

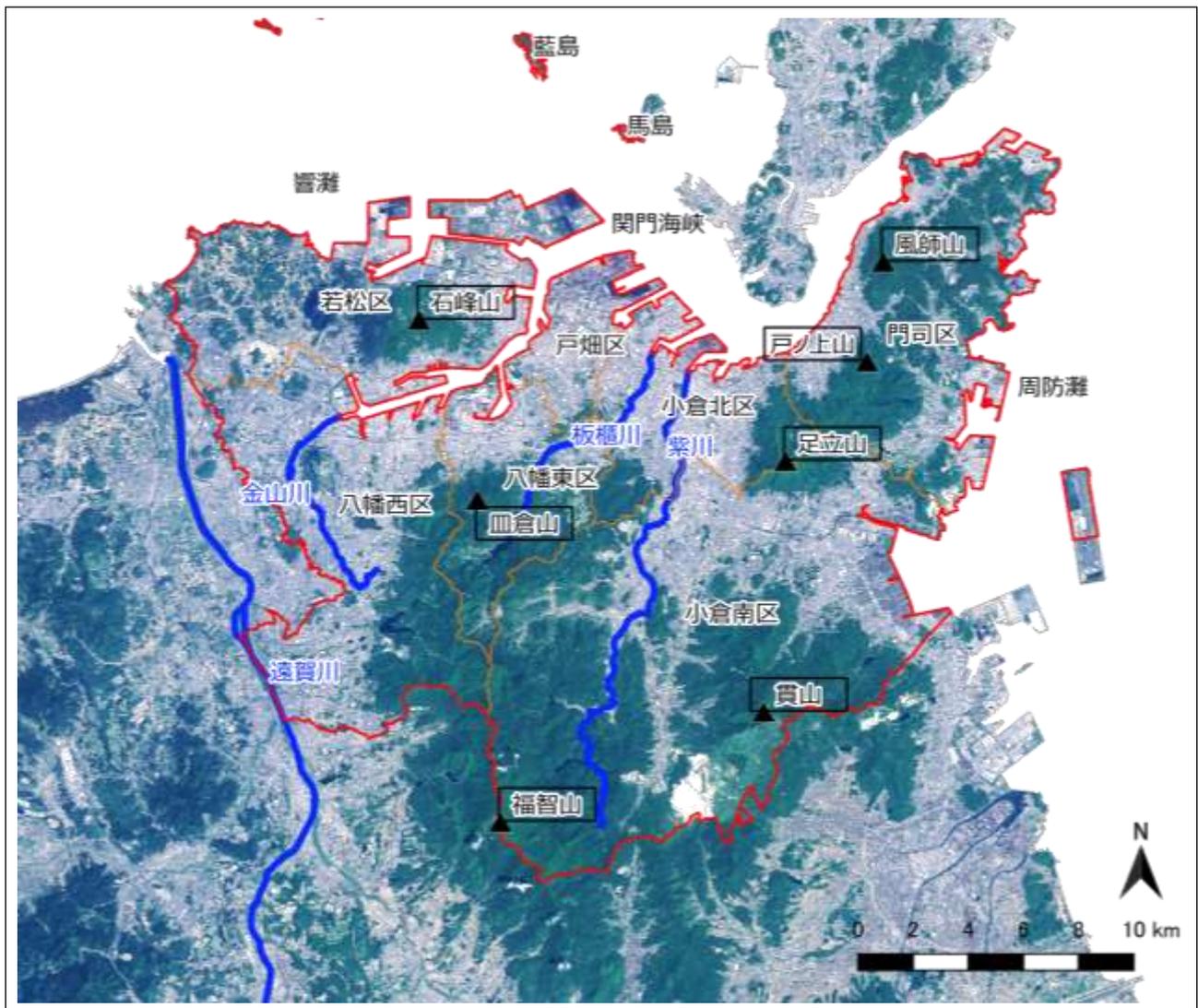


図2-1 地勢の状況

本市中央部は、福智山地の北部となり、標高 901mの福智山を中心に皿倉山、石峰山、貫山があります。また、東部には標高 598mの足立山、戸ノ上山、風師山が峰を連ねています。

貫山周辺にはカルスト地形の平尾台が広がっています。国内有数の石灰岩台地である平尾台は、貴重な地質鉱物として国の天然記念物に指定されています。

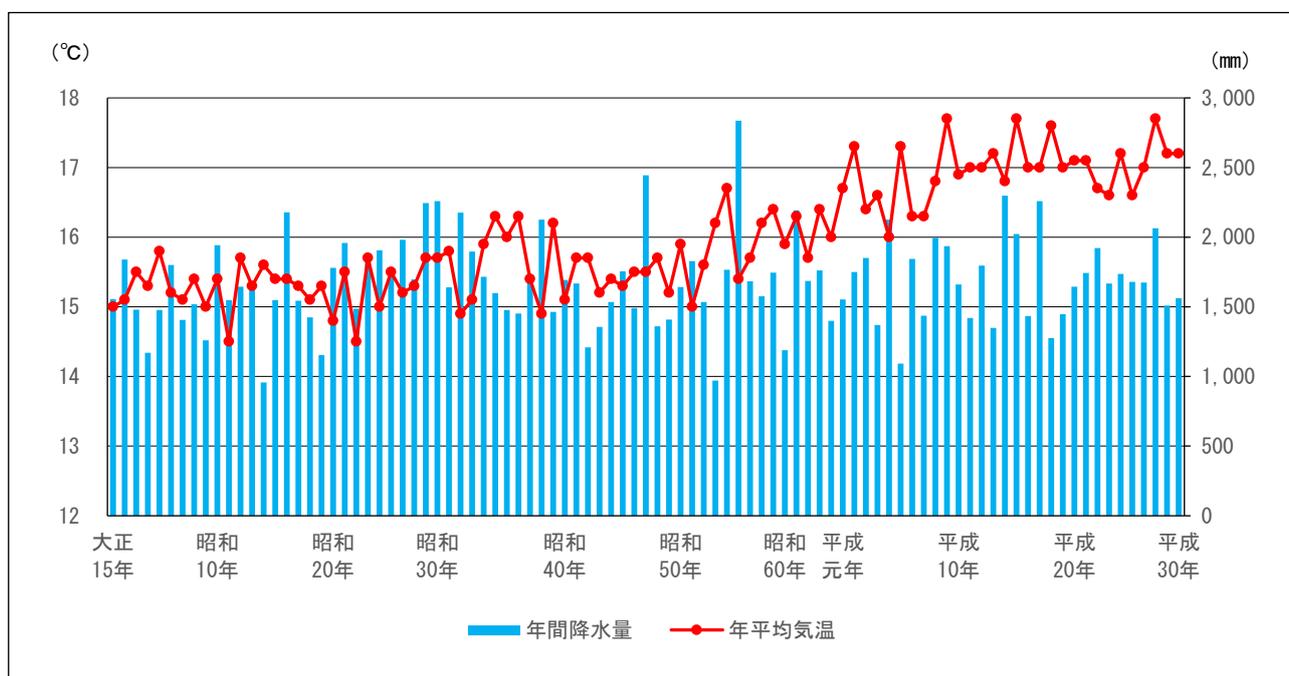
市内を流れる主な川は、福智山を源流とし市中央部を南から北へと流れる紫川と、市西端の一部を流れる遠賀川で、その他に板櫃川や金山川などがあります。そして、これら河口部の扇状地や山麓部の平地、埋立地などに市街地が形成されています。

②気候と自然災害

本市は、日本海（響灘）と瀬戸内海（周防灘）に面しており、その気候は、全般的に太平洋気候に属し温暖ですが、冬は日照時間が短いため日本海側の気候に近い特徴を持っています。

大正 15 年（昭和元年）以降の年平均気温の変化をみると、昭和 30 年代ごろまでは 15℃台で推移していましたが、その後は上昇傾向にあり、平成 10 年には 17.7℃を記録し、その後も 17℃台の年が多くなっています。

年間降水量については、年によって変動はありますが、概ね 1,000～2,000 mmの範囲で推移しており、大正 15 年（昭和元年）から平成 30 年までの平均は 1,679 mmとなっています。



出典：気象庁下関地方気象台

図 2-2 年平均気温・年間降水量

近年、気候変動の影響を受け、地球規模で気温上昇が進み、気象災害が頻発しています。本市においても、局地的な大雨による河川や水路の増水により、水害や土砂崩れなどが発生しています。

また、本市では、活断層による地震や南海トラフのプレート境界で発生する地震が想定されており、北九州市防災ガイドブックなどによる情報発信や防災意識の普及啓発などに取組んでいます。

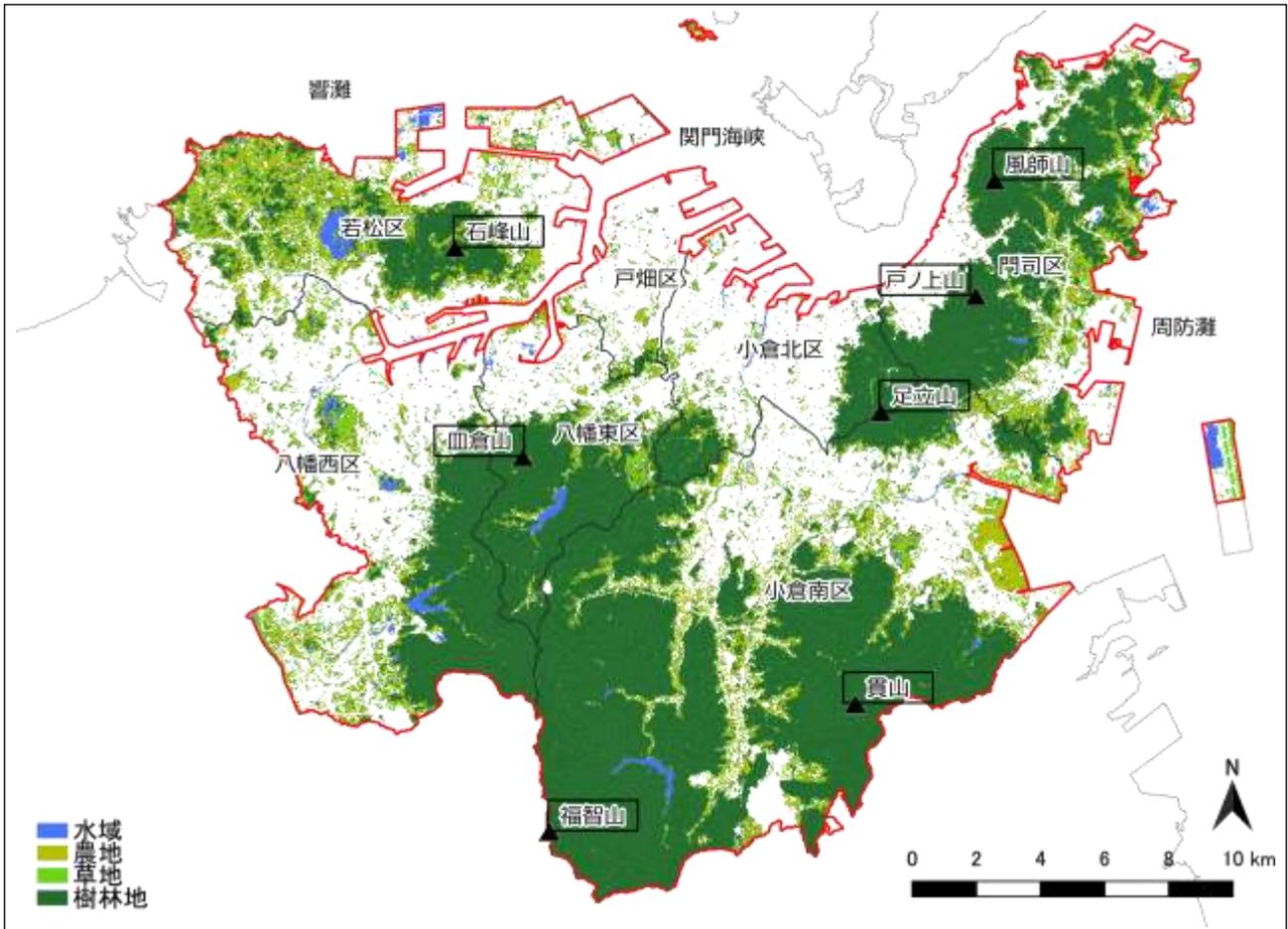
③動植物

本市の森林や河川、海、干潟などでは、様々な動植物が生息・生育しています。

干潟などの湿地には、希少種として広く知られている絶滅危惧種のベッコウトンボやカブトガニが生息しており、渡り鳥のズグロカモメやクロツラヘラサギを見ることがもできます。また、市内の一部は北九州国定公園に指定されており、福岡県レッドデータブック*に掲載されているオキナグサやトキソウなどの希少な植物を見ることがもできます。

本市は常緑広葉樹林帯に属し、現在の代表的な自然植生として、スタジイ群落、タブノキ群落、平尾台周辺のススキやネザサ群落などがあります。

市内各地では、生態系と調和した生息空間（ビオトープ*）において地域固有の生物を観察するなど、質の高いみどりを活用した環境教育や動植物とのふれあいづくりが行われています。また、長年にわたる市民の努力により、ホタルをまもる活動が続けられており、ホタルだけでなく、様々な水辺の生物の生息環境の保全が図られています。



出典：平成 30 年度衛星画像分析による緑の分布調査（北九州市）

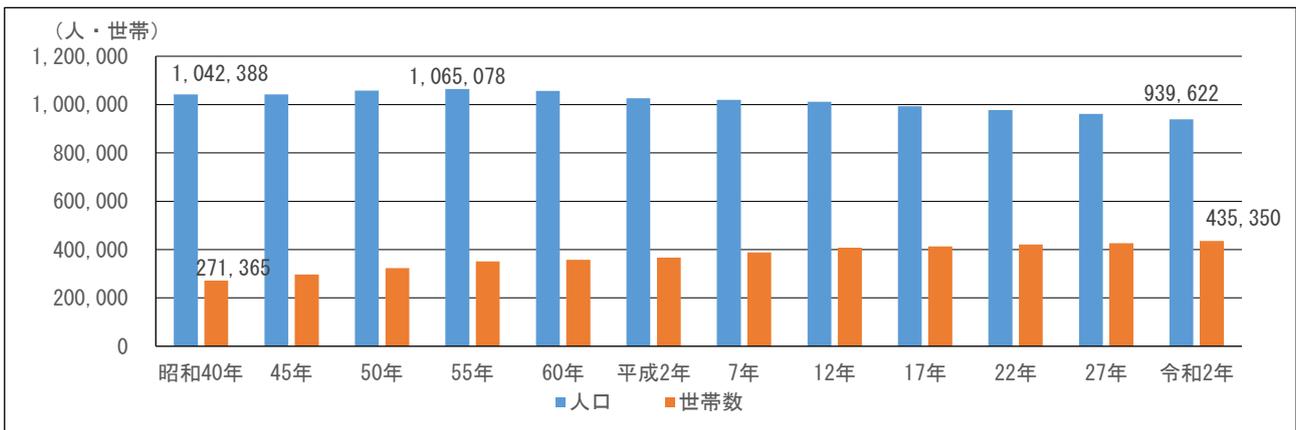
図2-3 みどりの分布状況

(2) 社会的特性

①人口と世帯数

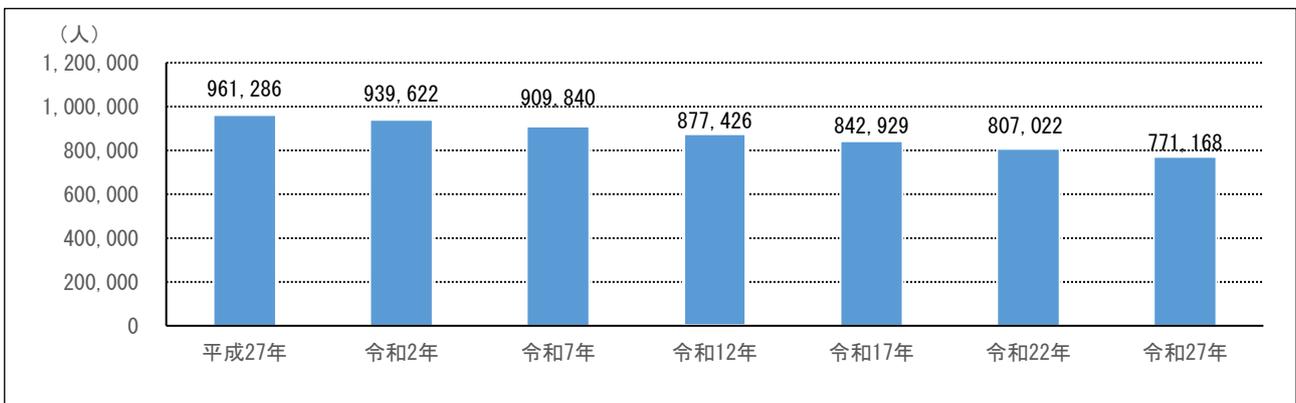
本市の人口は、昭和 37 年の 5 市合併以降、増加を続けましたが、昭和 55 年の約 107 万人をピークに減少へ転じました。平成 17 年には 100 万人を割り、令和 2 年には約 94 万人となっており、今後も人口減少が続くと予想されています。

一方、本市の世帯数は増加が続いています。令和 2 年の世帯数は約 44 万世帯で、昭和 40 年の世帯数の 1.6 倍となっています。



出典：各年国勢調査（総務省統計局）

図2-4 本市の人口・世帯数の推移



出典：平成 27 年と令和 2 年は国勢調査（総務省統計局）、令和 7 年以降は、日本の地域別将来推計人口 平成 30 年推計（国立社会保障・人口問題研究所）

図2-5 本市の将来人口推計

②財政

一般会計歳入のうち、市税については、概ね、横ばいの状況が続いていますが、人口減少などに伴い、今後も厳しい状況が続くと想定されます。

一般会計歳出では、少子高齢化の進行などの影響で、福祉・医療費の増加が続く一方、公共施設整備費を含む投資的経費はピーク時から大幅に減少した後、横ばいの状況にあります。

本市の公共施設は、昭和 40～50 年代に整備されたものが多く、老朽化が進みつつあり、将来的には大規模改修や更新に多額の費用が必要となります。

このため、福祉・医療費の増加が続くとともに、公共施設の更新などに対応した歳出の増加が見込まれます。

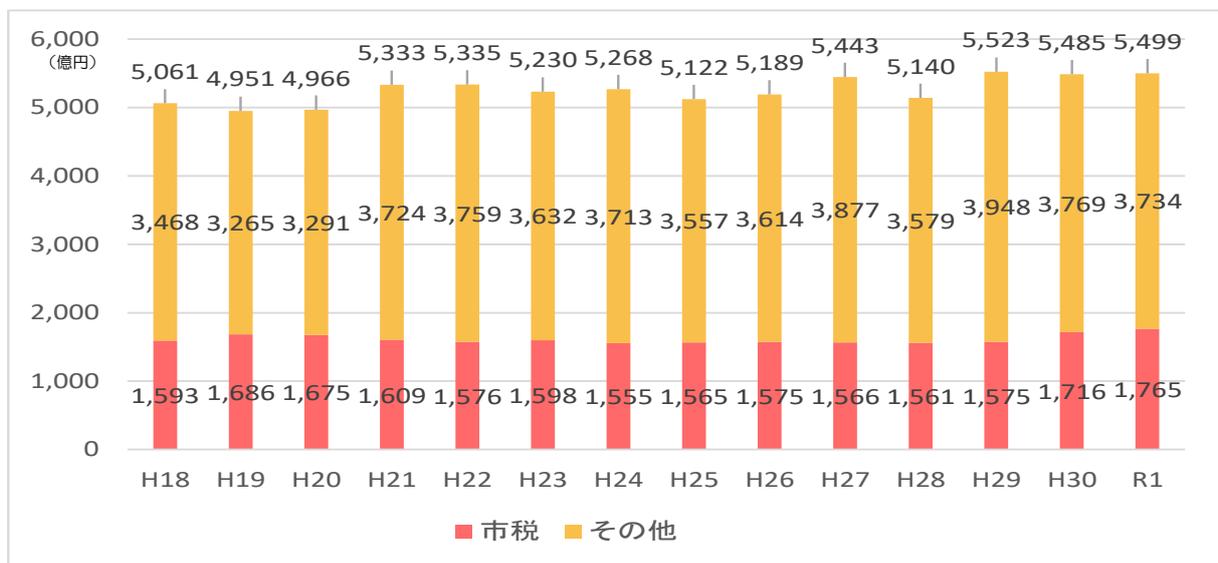


図2-6 一般会計歳入の推移

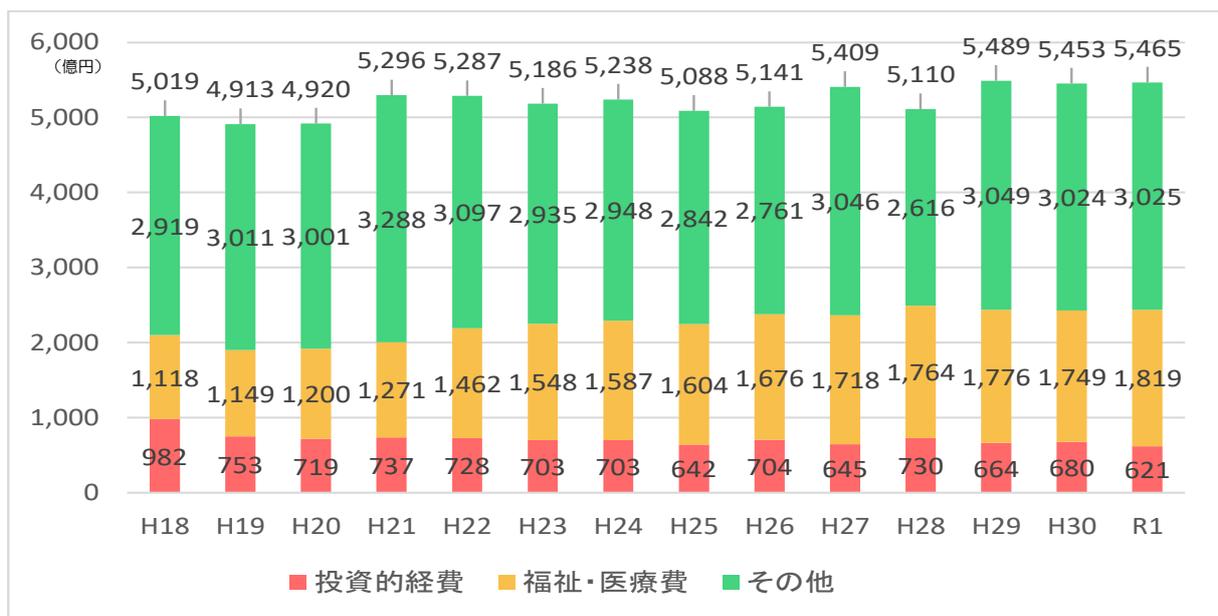


図2-7 一般会計歳出の推移

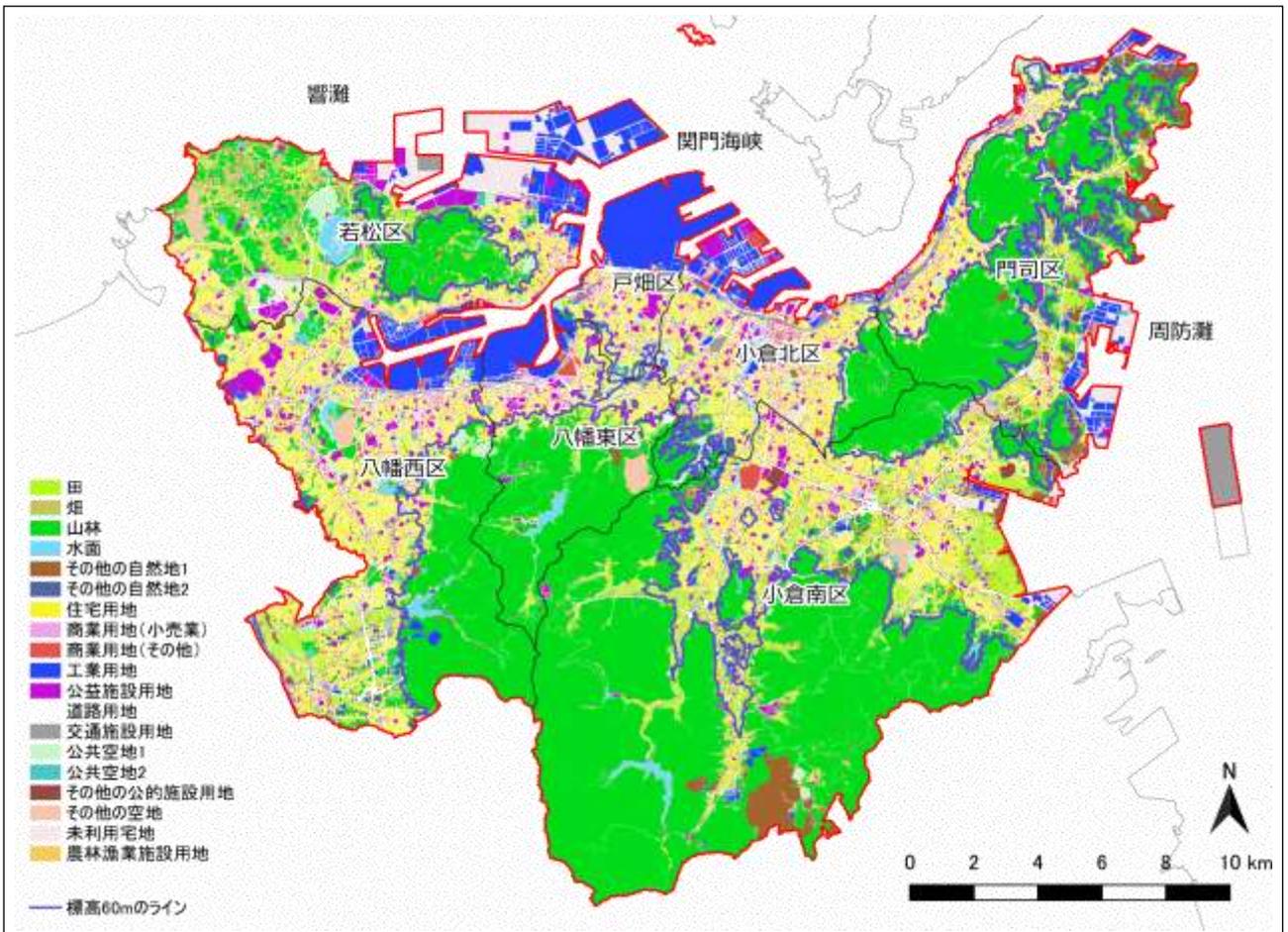
③土地利用

本市の市街地は、概ね標高 60m までの地域に広がっています。それ以上の標高ではほとんどが森林であり、山林面積は市域面積の 42.6%を占めています。山林と海に挟まれた市街地の多くは住宅用地で、響灘や周防灘に面する埋立地及び、洞海湾の埋立地は工業用地となっています。

表2-1 用途別土地利用面積

用途		面積 (ha)	割合
自然的土地利用	田・畑	2,886.0	5.9%
	山林	20,812.4	42.6%
	水面	1,083.9	2.2%
	その他の自然地 1・2	2,101.9	4.3%
	小計	26,884.2	55.0%
都市的土地利用	住宅用地	6,880.2	14.1%
	商業用地	1,200.2	2.5%
	工業用地	3,637.2	7.4%
	公共施設用地・その他の公的施設用地	1,968.5	4.0%
	公共空地 1・2	1,213.1	2.5%
	道路用地・交通施設用地	4,910.0	10.0%
	その他の空地・未利用宅地・農林漁業施設用地	2,171.6	4.4%
	小計	21,980.8	45.0%
合計	48,865.0	100.0%	

出典：平成 29 年度都市計画基礎調査



出典：平成 29 年度都市計画基礎調査

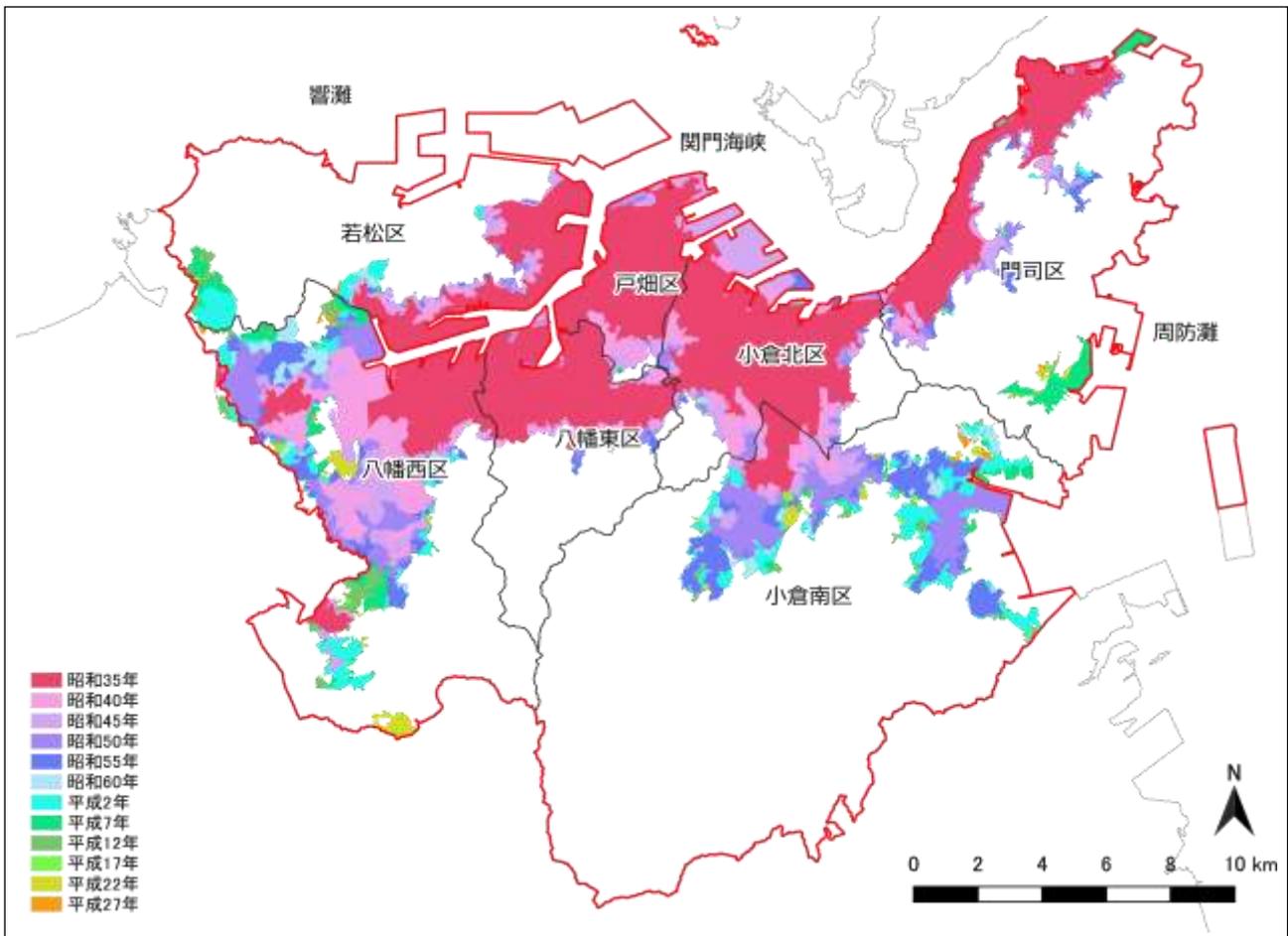
図2-8 土地利用の状況

④市街化の状況

本市の市街化の状況について、人口集中地区*の変遷をみると、昭和55年までは人口集中地区の大幅な拡大が続いていましたが、以後は部分的な拡大にとどまっています。

区別にみると、八幡西区や小倉南区では、昭和35年の人口集中地区は狭く、その後、現在に至るまで拡大が続いています。一方、その他の区では、若松区の北九州学術・研究都市周辺や門司区の新門司地域などを除くと、昭和45年と平成27年の比較で大きな拡大はみられません。

拡大箇所としては、平坦部の農地の宅地化や沿岸部の埋立てのほか、市街地縁辺部での斜面地の造成による宅地化などがあります。一方、傾斜度の大きな山裾部から標高の高い地域では、宅地化が進まず、山林が維持されています。

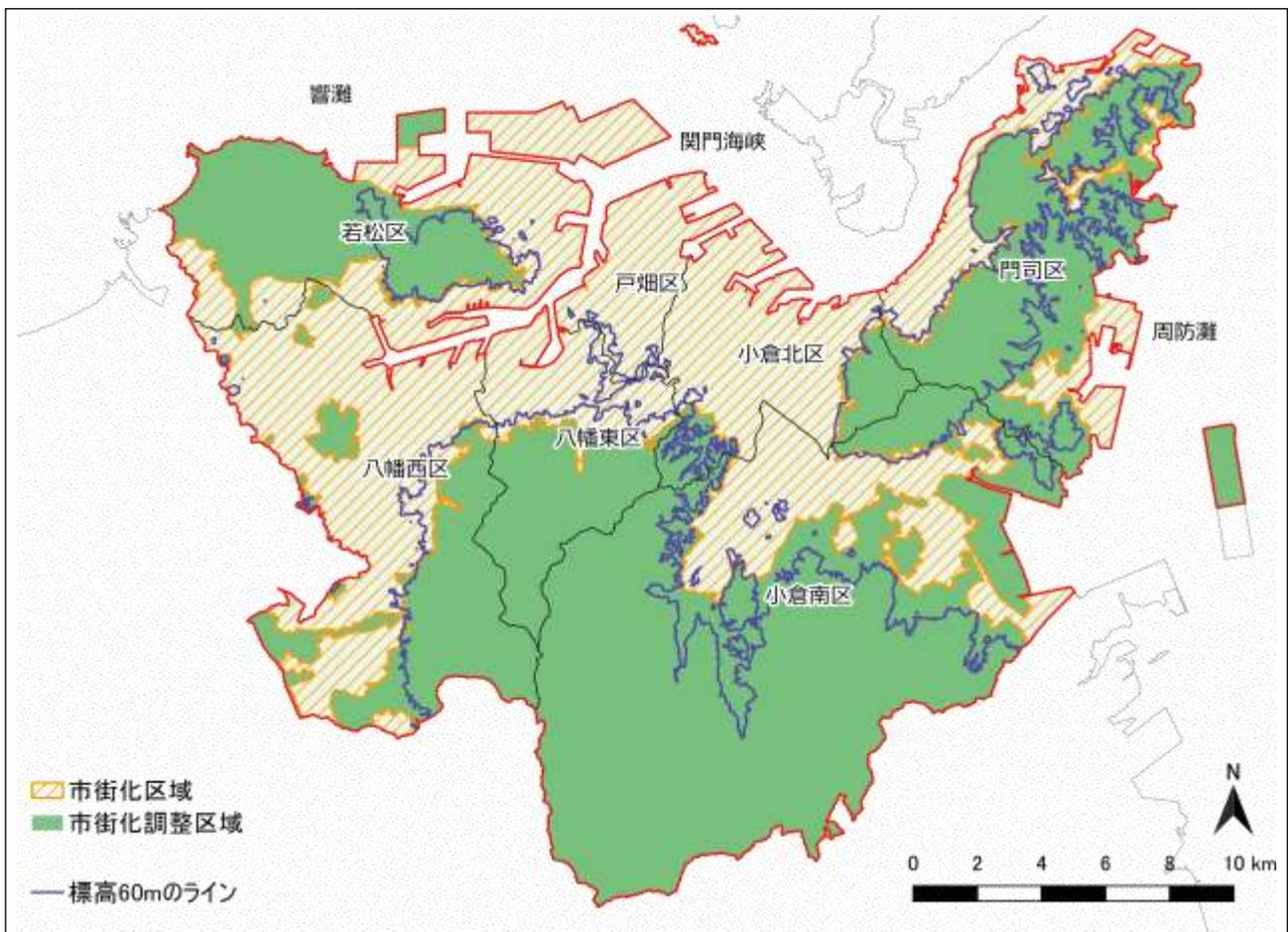


出典：各年国勢調査（総務省統計局）

図2-9 人口集中地区の変遷

⑤都市計画

本市では、市街化区域*と市街化調整区域*を設定し、計画的に市街地の整備を進めてきました。しかし、今後は人口減少により市街地の人口密度が低下し、都市インフラの効率的な維持管理や高齢化に伴う医療・福祉サービスの提供が課題となると想定されます。そこで、本市では、持続可能な都市経営とその健全化を進めるため、都市機能を集中し、資源の効率的な利用を図る「コンパクトなまちづくり」を推進しています。また、災害に強いまちづくりを進めるため、急峻な斜面地などの市街化区域の見直しも検討されています。



出典：平成 29 年度都市計画基礎調査

図 2-10 市街化区域と市街化調整区域

⑥みどりの景観

本市は市街地の近くに自然があることから、山や海が市街地の背景を形成しており、これが本市のみどりの景観における大きな特徴となっています。



図2-11 市街地から海への展望



図2-12 大規模公園と斜面地に広がるみどりと市街地

本市では、山や海だけでなく、市街地内に残された貴重なみどりなど、本市の良好なみどりの保全に取り組んできました。また、工業地には敷地内や敷地周縁部にみどりが確保された工場も多く、みどりと工場施設が調和した景観を見ることができます。



図2-13 みどりに囲まれた工場施設



図2-14 みどりづくりが進む響灘埋立地

さらに、多くの人を訪れるにぎやかな駅前や商業地では、みどりによる特徴あるまちの顔づくりを進めています。特に市民参加による花づくりによって、まちなかには数多くの花壇が設置され、地域の個性を豊かにしています。



図2-15 駅前でのみどりによる景観演出

このように、みどりを保全するとともに、創り出すことで、市内のどこにいてもみどりの景観を身近に感じることができます。